老舗の街・尾張町シリーズ5

古老の語る尾張町今昔　後編

歴史と伝統に新しい意味を求めて

目　次

明治の頃の情報について 1
文化・芸能のこと 1
海保青陵直筆の「娼説」を見て 2
尾張町人別書を開けば 3
町火消しと大名火消し 4
明治・大正の頃の生活風情 5
あとがき 7
参考：尾張町若手会憲章 8

表紙題字　松田平四郎氏

表紙写真　尾張町町民文化館（石川県中小企業団体中央会提供）

尾張町よもやまばなし

明治の頃の情報について

戦争を知らない世代が増えている昨今とは違い、私(松田平四郎)が生まれた明治四十一年は明治三十八年の日露戦争終決条約決定の間もない頃で戦時色が濃い時代でした。ところが、今と比較にならぬ程に情報が遅く、不正確であったのです。電報・電話はあるにはあったがテレビといった便利なものもなく、昔はもっぱら「口」でしゃべり、「耳」で聞いて、それが第二者第三者を通して伝わってくるためだったのでしょう。　たとえば明治三十八年五月二十七日が日本海海戦ですわ。翌二十八日には完全に日本が勝ってロシアの軍艦を五艘ぶんどって佐世保軍港に戻り、捕虜約８，０００名を海軍病院に連れ帰っているはずなのです。ところが関係官庁その他に連絡が行くだけで終ってしまい、民間の新聞等には月末に東京や大阪ですこ～し出るわけです。それも完全に勝ったと出ず、ロシアのバルチック艦隊と日本の連合艦隊が遭遇したという程度にしか載らないのです。完全に分って新聞社が号外を出したのが六月三日、それが我々の手もとに届いたのが六月四～五日頃で、その時皆が屋根へ上がってバケツや金ダライをたたいてやっと道行く人も戦勝を知ったという位のもんでした。

現在の情報化時代の中、やれＧ５やＧ７、又テレビといったものに慣れている時代からは想像もつかない悠長さがあったわけですわ。少なくとも当時金沢は全国の都市の中では五本の指に入っていたというのにですよ。明治でさえそうやから、それが前田又左衛門利家公が七尾から金沢に入城して、政治の内容が反映して一般庶民に知られるのに年一年を越さにゃ分からんという位がこの時代の人の生活やったと思うんです。

文化・芸能のこと

廃藩置県実施から百二十年たった現在から考えてみると、石川県民及び富山県民は、江戸時代においては藩主前田公が他の藩のように領地替えや没収で交替することもなく、安定していて本当に幸せやったと思います。それだけ加賀

は他に強く訴えることなく、精神的に深い独自の文化芸能が時間をふんだんにかけてじっくりと熟成して行けたのです。青森の津軽三味線などとは一味違った、能楽のように動きの少ない中に良くみれば何もかも含まれているという奥ゆかしさ……あなたこれですよ。日本文化の源流ともいえる京都に一脈通じるところがありながら、やはりここ金沢独自の品位が感じられるんです。

加賀友禅から金箔仏具、扇子、色紙それぞれに決して引けをとるものではないわけです。消費都市江戸や、日本文化に色をつけて切り売りしていた京都に対し、藩主の政策的な意味あいもありましたが、連綿と続くひたむきな文化の創造を積重ねた金沢の魅力は無視できるものではないのですよ。そしてそこに強力な商人町尾張町(尾張荒子地方より誘致した商人達の街)の経済力が大きな背景になってます。そりゃ最初は京都大阪や江戸の芸人・職人に金を払って金沢に来てもらったりしていましたよ。しかしここの風土を生かして北陸の中心にしようという藩主の情熱が他と違うんです。

今では、茶の湯の道具一式にしても九谷・大樋焼きに代表される陶器に始まり、全て自前でまかなえるのは京都の他に金沢しかありませんよ。能楽だって本家のあった徳川庇護の江戸(東京)より、加賀宝生といえる程決してひけは取りません。尾張町の旦那衆にしてもほとんどが謡のたしなみがあるといえますし、実際そうでしょう。いわば尾張町人の気質は金沢の伝統文化の中心地ともいえる誇りをもっているのです。

海保青陵直筆の「娼説」を見て (松田家に伝わる古文書)

娼説というのは芸者や娼妓のことをいい現しているのです。いわば今流では売春ということですかな。その時代を越えて男と女の根本的なところから始まる処を論じているんでしょうな。

これを開いてみますとほとんど読めず意味がわからないんですが、しかしここで一番目につくことは書いてある文章より文字ですわ。江戸時代というのは日本人の内十人の九人五分までが御家流というやさかたな草書の文字を書いたんですよ。ここでは漢学者であるというんでしょうか、大変緊張書きでまこと

に字が枯れているというか書き慣れた文字になっております。

海保青陵という人はどういうことでこんな説を唱えたかといいますと、本来は江戸時代の経済学者として有名なんです。まず最初に孔孟の思想を研究し、宋時代の学問の研究の中から「経世済民」の学を覚えるわけです。生産を維持しつつ貯蓄して第二次の生産に備えることで、国産豊かになり初めて自分等も幸せになるということを見出だしたんです。その上で、徳川封建時代には一体諸大名はどうすれば良いのか、百姓・町人はどうすれば良いのかを教え回ったんです。だから諸大名には何といってもまず国を豊かにし、強い兵隊を置きなさい(いわば富国強兵論)とし。百姓に向っては良く人智を考え、新しい新田を耕作してたんぼの悪い水を抜き、収穫を倍増させるよう心がけよとし。作ったものはただ食べてしまうのでなく、金に替えて生産に寄与させよといったんです。

青陵が金沢に来た折に、前田藩に対して経済的な無駄が多いからもっともっと貿易を振興管理しなさい。ある程度貿易品に課税を掛け、その金で漁民も仲買人も援助して喜んでもらうようにして、最終的には御殿様もお金の儲かるようなのはこういう方法だと具体的に述べたのです。もっとも、これを述べたからといって、青陵個人には責任を全てなすりつけないように宜しくお願い申し上げます、とことわる付近が封建時代の様子を如実に現しています。

「娼説」の最後の部分に青陵道人鶴(自分のことを鶴と呼んでいたそうです)記すと書かれてあり、文化二年の夏金沢において遊ぶとなっております。こんな大海の中の一滴という人がおり、その他に三〜五人も共鳴する人がおり、佐藤某という経済学者もおり、何となく経済がほの明るいんですね。しかし、この書物をつらつら見ても娼妓の「娼」という字がほとんど見当たりません。やはり、人間の根本的なことを経世済民に例えて言ってるんでしょうね。

<海保儀平書による>

尾張町人別書を開けば

パッと開くと、間口七間三尺九寸五分、住吉屋太平と書いてあります。これは十間町にあった昔の御手判宿で、ここに泊まれば人別改めがなかったのです。

住吉屋の主人及至番頭が宿泊客と応対して間違いなしとして宿帳に記載して、次の宿泊の宿舎を紹介し、即御手判状を出してこれが通行手形となります。そして住吉屋がその人物を証明することになり、わずらわしい人別改めがなかったのです。こうしたことが出来たのは、金沢であと一〜二軒しかなかったのです。

又、八間四尺四寸、組合頭平四郎と書いてあります。これによると私の先祖は文化十三年に尾張町に来たようですね。その先には鶴来屋という人がおったようです。そこで現在も店構えの残っている処を見て行くと、十三間九寸、森下屋八左衛門と書いてあるのは森八です。福久屋伝六は石黒商店ですし、あと森忠三郎の森忠商店や細字左平の細字印房店などとあります。

町火消しと大名火消し

町火消しには何の生活の保障もなく、まず自らが稼がなければならんかったんです。夏・冬に大きな屋敷が一軒あれば、必ず庭もあるからいろいろ仕事が出来るわけです。稼人〔かせにん〕として出入りし、下と上の仕事をしたわけです。下とは、井戸替え（井戸の中へ入って底をきれいにし、シュロの葉や木炭を入れて水をこす）をすることです。上とは、屋根葺き替えをすることです。その次は、冬場の準備の雪釣りや雪囲いをするんですが、金沢の当時の座敷は今のようにガラスというものがないので、木の雨戸に明かり窓を付けたものを作って入れたんです。実際、軒先が突き出ていて濡れ縁のないのが金沢の座敷であり、ひじょうに暗いものでした。そしてこうした仕事をする時、隣近所に迷惑が掛からないように前以て挨拶するのが当時の風習でしたが、最近は本当にしなくなり寂しいことですよ。

さて万一火災が発生すると、稼人の人達が印ハンテンを着て現場へ馳せつけるわけです。昔は板葺きの家が多かったもので、板屋根をまくり、まず火が移り易いひらものや柱を取って（火口を取るともいう）火事の拡大を防いだのですが、その火口の取り合いから火事場のケンカがよく起こったものです。火口を取ってしまえば、「まとい」を上げることが出来、その組の者の裁量で水を掛け

たりして火災の延焼を止めるようにして行けたのです。今でも当時の風習の名残りが、浅野川消防分団を始めとする金沢の消防団の「金箔のまとい」として残っているでしょう。参考までに、江戸の火消しの纏は胡粉〔ごふん〕仕上げの白いもので、いずれも今日に伝わっています。

大名火消しは名のとおり、藩が直接に扶持を出して経常的に配置してあったものです。火消し人の生活の保障のゆえか、如何様なことがあってもたいていの場合は出張って行きましたよ。この人達の火消しというのは、火を消すというよりもむしろ座敷廻りに飾ってあった調度品類を手早く蔵の中へ収めるのが主たる仕事だったようです。そのため、相撲取りのような力のある者が多かったといいます。

昔は火災が起こり他人の家へ類焼すると厳重な処罰が下ったものです。(現在の法律はそうではなく、責任がない) それこそ類焼すると、もう言い訳がたたないのです。「お前さんところの火が我家に燃え広がった、さあどうしてくれる」となるんです。一度火災を起こせば、もうその界隈では住めなくなり、引っ越しするしかありませんでしたよ。

又、武家屋敷で火災が発生した場合、屋敷の四方の長屋や堀の内では類焼がなければ、高煙〔たかけむり〕というて火災と認めず、その邸の主の財的負担で屋敷を新築しても良いわけでした。いうならトガメがなかったのです。今日でいうならボヤでしょうか。

明治・大正の頃の生活風情

現在と比べて、消費生活はとにかく慎ましかったといえます。

例えば、<いわし>なんかがいっぺん取れると、米の値段が下がるという程豊漁でたくさん取れるわけです。ところが冷凍設備もないもので、今日食べても明日まで残るということがないのです。瞬間的に値が易く手に入り、豊かになるけれども、全体的にはやはり現在の方が安定して豊かですね。<かばやき>位がいつでも安かったものでしょうね。

意外に高くなったのは鯖です。当時は、あまり人が食べずに、天狗さんが嫌

がったというので、子供がいなくなると「鯖食わたっだら〜や、鯖食わたっだら〜や」と町を歩いて売る人から、私ら旨くなくても一年の内に定期的に食べさせられたものです。値も安かったですが、たいていは煮た鯖でした。

醤油が高くて、てんでん(それぞれ)の家では何かというと味噌で物をしつらえ(作り上げ)たものです。だから味噌料理が調味料の雄たるものでした。醤油は使っても贅沢品としてでした。たとえば、一時期醤油税が課せられた時代もあったはずで、その辺から民間の手前醸造が中止させられたことがありました。確か一升に一銭か二銭でした。これはちょうど酒税と同じように思われ、民間の(家庭での)醸造が止まったのです。それでも能登の海浜では魚を原料とした<イシル>醤油が隠れて作られていたのでなお高くなったんでしょうね。贅沢といえば、卵はその最たるものでしたよ。

私が小学校の間は、全て紺の木綿の着物に紺の棒縞の袴をはいてました。遠足などの折はワラジを履いてたんですが、ちょっとした金持ちは地下足袋を履いてましたね。それをゴム足袋、軍足袋といって贅沢品に羨望を感じていました。女の子も、えび茶色の袴をしているのは良い方で、白いエプロンみたいな前掛けをして小学校へ行ってました。

学校の中はがっぱ(皮膚病の一種)臭いといいますか、それとトラホームが蔓延していたんですな。身体検査というとこれらの発見治療に終始していたのが実態です。今では、衛生的になって病気もほとんど一掃され、臭いといったら学校給食の香りくらいでしょうか。それと同時に、昔はあった水の臭い、あるいは庭先の苔や樹木の臭いといったものがなくなり、水にしても水道の薬品臭い個性のないものになって来ていますが。情緒は確かに薄れつつありますよ。

昭和六十二年二月二十二日　松田平四郎談

松田平四郎氏　略歴

明治四十一年三月九日生。旧制二中を大正十五年三月に卒業。家業一筋に従事し、昭和十八年より松田文華堂十代目を襲名して現在に至る。石川郷土史学会会員。その格式ある話は尾張町界隈に住む者にとって生き字引である。

あとがき

先の「老舗の街・尾張町シリーズ４」も、ご愛読頂きありがとうございます。生まれ育った尾張町のことを調べるうちにすっかりシリーズ化してしまい、今では私達若手会にとってこの小冊子は無くてはならぬものに成長して参ったようです。これも一重に親心で見守ってくれる尾張町商店街振興組合があればこそと改めて感謝致します。

さて、今回の題材は２月２２日の若手会例会において、尾張町の古老である松田平四郎氏より、歴史と町並についての今昔物語をお聞きした折に、話がはずみ過ぎて延々５時間強となり、とても一冊に収めきれなくなり、ここに「尾張町よもやま話」として別に編集した一冊を出版することになったために出来たわけです。ただ単に過去の栄光をほじくり返しているだけなのではなく、そこから現代に生かせる新しい意味を若手会メンバーは模索しているのですが、やはり愛着を感じるこの街の貴重な歩みを振り返る時、涌き出る如く知らされる事実に、ついペンは(ワープロは)進み勝ちになるようです。

金沢のかつての中心商店街として、一時はその栄華を欲しいままにしたこともありましたが、時代は個々の商店の力は強くとも、もっと広い視点に立って商店街及び近隣周辺地域が新しい街創りを総合的に目指すべき時期に来ております。私達若手会を始めとしてこの街を愛するニュー・パワーは、先人の培って来た実績を継承しつつ、アイデンティティーとイノベーションによる創造的進化を遂げる使命を帯びていると考えるべきでしょう。

幸いにも(?)近代化という波の乗り遅れは、この界隈に現代のお金では換算出来ない程の価値ある資産を遺してくれております。老舗の街尾張町、懸作りの町橋場町、水清い浅野川風情、見あげれば臥したる竜に似た臥竜山(卯辰山)を眺望し、加賀百万石の象徴金沢城の正門前に位置し、近江町市場の活況と武蔵ケ辻を擁する可能性を現代に生かすべく、私達若手は行動しているつもりです。いろいろ至らない点についてのご指摘は喜んで受けるつもりですので、今後とも皆様方の暖かいご指導をくれぐれもお願い申し上げます。

尾張町若手会憲章

尾張町に生まれ育って来た者が、連綿と続いて来た老舗のたくましさを受け継ぎ、時代を越えて人と人の「ふれあい」を大切にし、この街の良さを心から愛し誇りを持つ若手の会である。

それはこの街より我を生かす道なしとし、古さの中に新しさを、新しさの中に古さを見い出して変わることのない魅力を掘り起こし、先人の求めた以上の未来へ自らの地歩を進めつつ、失敗を恐れず有言実行の行動力をもって、周辺地域とともに個性的な真の活性化を目指すものである。

記

1．若手会はその行動力により、常に周辺地域のリーディング・パワーたらんと願う。

1．有言実行の行動を押し進め、常に感謝の気持も忘れずに、もって成果の輪を広げて行くことを真情とする。

1．派手さよりも地に根の生えた活動こそが大切なのであり、継続をこそ尊ぶ忍耐力を忘れない。

1．手づくりの街創りを目指し、安直に地元を遊離した一時のかっこ良さには惑わされない。

1．時代の変遷を常に先取りし、たくましく商売してきた先祖の志しを尊重する。

1．尾張町の活性化はこの町並だけの問題ではなく、周辺町会と共に協力しあってこそ成し遂げられるものであることを自覚する。

1．尾張町の魅力を引出し、他の地域の町と共存して行くことでコンベンション都市金沢の一翼を担う。

【1987年1月14日制定】

１９８７年５月発行

尾張町商店街振興組合

理事長　山田　勝二

尾張町若手会

会長　　石野　琇一

金沢市尾張町一丁目１１番８号